World Vision
この子を救う。未来を救う。

南三陸町と
ワールド・ビジョン・ジャパンによる

子ども参画の事例

～南三陸町まちづくりプロジェクト～

発行：特定非営利活動法人ワールド・ビジョン・ジャパン
協力：南三陸町教育委員会
南三陸町子ども会育成会連絡協議会

子どもに笑顔を！
地域に夢を！
～南三陸町まちづくりプロジェクト～

2011年3月11日に発生した、東日本大震災。ワールド・ビジョン・ジャパンでは震災発生直後より、世界各地の緊急人道支援の現場で培ってきた経験を最大限に活かし、行政機関、企業、団体、NGO/NPOと連携して支援活動を行ってきました。そのような支援活動を行う中で、支援物資や食事の配布を手伝う積極的な子どもたちの姿に触れ、想いを強めたことがあります。それは、子どもは地域の将来を担う貴重な存在であり、地域の未来を築く未知数の潜在能力を持つ存在ということです。この将来の担い手の意見を復興計画に反映させることは、地域の未来を考えていく上で欠かせないことです。

ワールド・ビジョン・ジャパンは、震災によって大きな被害を受けた宮城県南三陸町で支援活動を行う中で、震災により同町で地域活動を行ってきたジュニア・リーダーの活動場所や研修の機会が減少していることを知りました。そこで、南三陸町教育委員会に対し、ジュニア・リーダー研修の一環として、復興計画に子どもたちの意見を反映する活動を行うことを提案し、「『子どもに笑顔を！地域に夢を！』南三陸町まちづくりプロジェクト」に取り組むことになりました。この報告書は、約1年間にわたる一連の活動の記録です。

次世代の子どもたちが、自分たちの住む地域での活動に携わる機会を得ることができれば、地域は未来志向となり活性化し、子どもたちのみならず地域に住む人々にとっても、より良い未来が拓けるのではないでしょうか。そのためには、まず大人の側に、子どもたちを「地域の将来を担うパートナー」としてとらえ、その声や視点を地域の課題解決に生かし、ともに取り組む姿勢が必要です。

この報告書は、皆さまに広く活用していただくことを目指し、プロジェクトの準備段階からの過程を時系列にまとめ、それぞれの過程で凝らした工夫や直面した課題なども紹介しています。この報告書で紹介する事例が、皆さまの地域で子どもたちとの協働による、より良い地域づくりの一助となれば幸いです。

ワールド・ビジョン・ジャパンは、子どもたちが意見を述べ、大人と対等に語り合い、より良い地域の実現に向けた活動に参画していくことができるような地域が日本全国に広がることを願っています。

ワールド・ビジョン・ジャパン

目　次 CONTENTS

2 **はじめに**
南三陸町について
MVCぶらんこについて
ジュニア・リーダーとは
南三陸町ボランティアサークルぶらんことは
4 南三陸町まちづくりプロジェクトの流れ

6 **Ⅰ.準備**
7 1.地域との連携
ステップ-1　南三陸町教育委員会との話し合い
ステップ-2　南三陸町復興推進課へのヒアリング
9 2.子どもたちの意思確認
ステップ-3　南三陸町内の子どもたちへの意思確認（アンケートの実施）
ステップ-4　ジュニア・リーダーの意思確認
11 3.アドバイザーの起用
ステップ-5　アドバイザーの起用

12 **Ⅱ.実施**
13 1.ワークショップの開催
14 ステップ-1　ワークショップ開始
16 ステップ-2　アクションプラン作成
17 ステップ-3　町長との意見交流会
2.イベントの開催
18 ステップ-4　南三陸町の人々、子どもたちに向けた発表と意見集約
19 ステップ-5　同年代の中高生との交流事業
21 ステップ-6　ゆう杉並、四谷ひろば見学

22 **Ⅲ.提案書提出**
23 ステップ-1　提案書の作成
24 ステップ-2　提出前の準備
ステップ-3　町長への提出

26 南三陸町まちづくりに対する提案書（概要）
30 プロジェクトを通じての課題
32 アドバイザーによるコメント
34 メディア掲載記事
40 ワールド・ビジョン・ジャパンについて
41 東日本大震災緊急復興支援について
42 ＭＶＣぶらんこについて
44 子ども参画に関する参考文献リスト
付録DVD

はじめに

南三陸町について

南三陸町（みなみさんりくちょう）は、日本の宮城県北東部に位置し、太平洋に面する漁業の盛んな地域です。東日本大震災により、町内の62%もの家屋が損壊するなど、壊滅的な被害を受けました。

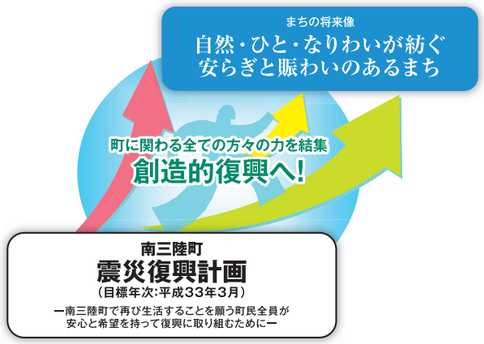
■人口・世帯数

（2012年7月末日現在）

男 7,531人、女 7,806人 計15,337人、4,894世帯

■復興の基本理念

“その理念を「『自然・ひと・なりわいが紡ぐ安らぎと賑わいのあるまち』への創造的復興」と定め、南三陸町で再び生活することを願う町民が安心と希望を持って復興に取り組めるよう、町に関わる全ての方々の力を結集して実現していきます。”



（出典：「南三陸町震災復興計画　絆　～未来への懸け橋～」2011.12.26策定　2012.3.26改訂より抜粋）

【震災前】

【震災後】

写真提供：佐良スタジオ　佐藤信一

MVCぶらんこについて

ジュニア・リーダー（以下JL）とは

地域で活動する青少年のボランティア団体で、子ども会活動や地域活動の振興を図るため、子ども会活動の支援および地域活動を行う、中学生・高校生・勤労青年などの年少指導者です。

JL初級研修会＆南三陸・本別ふるさと交流研修会
（写真提供：南三陸町教育委員会）

南三陸町ボランティアサークルぶらんこ（以下MVCぶらんこ）とは

約40年以上前から、志津川町ボランティアサークルありんこ、歌津町ボランティアサークルどろんこのJLが活動してきました。2005年10月1日に志津川町と歌津町が合併し南三陸町が誕生した後は、翌年からMVCぶらんことして活動を開始。2012年9月1日現在、59名の中学生・高校生が登録し、地域の子ども会活動にとどまらず、宮城県内外で行われるJL研修会や各種事業のボランティアスタッフなど、積極的な活動を行っています。

（出典：「南三陸町ジュニア・リーダーMVCぶらんこ～字かけ・汗かけ・恥をかけ～」より抜粋）

JL卒業式　（写真提供：南三陸町教育委員会）

※MVCぶらんこ、JLの沿革・歴史等詳細は、「MVCぶらんこについて」P42～43参照

南三陸町まちづくりプロジェクトの流れ

約1年間におよんだ南三陸町まちづくりプロジェクト。
準備・実施・提案書提出と積み重ねてきた一連の活動内容を時系列にまとめました。

2011年

3月 11日

東日本大震災発生

Ⅰ.準備

8月

南三陸町教育委員会
生涯学習課訪問

9月

子ども未来人サミット参加

10月

JL、MVCぶらんこ
と出会う

11月

南三陸町まちづくり
プロジェクト企画提案、
打ち合わせetc

12月 12日 19日

MVCぶらんこ会長に
ワークショップとアンケートの提案

南三陸町長との意見交流会

南三陸町内の小中学校、
高校にアンケート実施

2012年

1月 15日 29日

ワークショップ

まちづくりワークショップスタート！

2月 12日

MVCぶらんこ
ポロシャツ製作
ワークショップ

Ⅱ.実施

3月 25日

3/25イベントちらし製作・配布、
南三陸町内の小中学校生に
参加申込書配布
会場下見、リハーサル

南三陸町まちづくりプロジェクト
「子どもに笑顔を！地域に夢を！」
～子どもたちのまちづくり意見交流会～in南三陸

4月 11日 30日

アンケート結果を
各小中学校、
高校へ報告

まちづくりワークショップ再開

5月

6月 23日

ワークショップ

6/23イベント打ち合わせ
in南三陸、東京etc

Ⅲ.提案書提出

30日

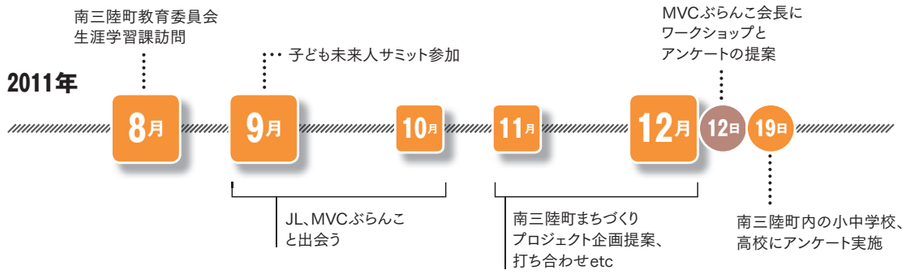
南三陸町復興計画に対する
南三陸町長への提案in南三陸町役場

7月 22日

これまでのワークショップ
を振り返るMVCぶらんこ
座談会

中高生交流イベント “The POWER we share, the POWER we have”
～震災を乗り越えて、いまこそジュニアができること～in東京

Ⅰ.準備



1.地域との連携

取り組みを始めるにあたっては、子どもたちの声を地域づくりに反映することについて、その地域に住む人々の意思や姿勢を確認し、理解を得ながら、ともに活動を進めていくことが大切です。その際は、地域の行政機関の承認や協力を得ることも必要になります。活動の成果が一過性のものではなく地域に根差すためには、支援団体による活動終了後も、地域の人々自身が主体となって、活動を継続していくことが重要だからです。

ワールド・ビジョン・ジャパン(以下WVJ)では、南三陸町での緊急復興支援を行っていく中で、MVCぷらんこのJLがこれまで町内で様々な活動を行ってきたこと、また、震災後は活動拠点であった公民館の全壊などにより、活動の場が減少していることを知りました。そこでJLとともに、復興計画についての子どもたちの声を町に届けていくことができないか、JLを管轄する南三陸町教育委員会に働きかけることになりました。

ステップ-1　南三陸町教育委員会との話し合い

2011年11月中旬から下旬にかけて、WVJは南三陸町教育委員会において、青少年教育の担当者、JLの育成指導担当者と話し合いを重ねました。両担当者は南三陸町の復興にMVCぷらんこが関わることを希望しており、JLの意思を確認した後、JL研修の一環として下記の3点を最終目標とした「子どもの声を南三陸町震災復興計画に反映する取り組み」を行うことを決定しました。

①南三陸町震災復興計画に対する子どもたちの意見をまとめ、南三陸町内の人々に発表すること

②子どもたちからの南三陸町震災復興計画に対する提案として、南三陸町長に正式に提出すること

③2012年3月25日に南三陸町内の人々に向けた発表イベントを実施すること

さらに、「子どもと大人の架け橋になるのが、JLの役割」と考え、南三陸町内の子どもたち全体にアンケートを行うこと、またJLを対象にワークショップを実施し、その様子を動画で記録することになりました。

★エピソード その1
～MVCぶらんことの出会い～

WVJは2011年8月、南三陸町教育委員会生涯学習課との打ち合わせの中で、JL制度やMVCぶらんこの活動について知りました。

その後、JLについて理解を深める機会として紹介されたのが、東北の被災3県のJLが集まり、被災した町の再生や日本の未来について語るイベント「子ども未来人サミット」（主催:子ども未来人サミット実行委員会 共催:仙台市教育委員会、子どもの笑顔元気プロジェクト）でした。MVCぶらんこのJLも参加しており、他地域のJLとともに、中学生･高校生として自分たちができること、政府、行政に伝えたいことなどを、JLとしての自分たちの体験から積極的に発言していました。

さらに、同年10月にWVJが南三陸町の小学生向けに実施したイベントでも、JLの協力がありました。JLは、参加者の小学生が南三陸町から仙台市まで移動するバスの中、クイズや伝言ゲームなどのレクリエーションを行いながら積極的に小学生のケアを行っており、JLの活動の様子を間近で見ることができました。

ステップ-2　南三陸町復興推進課へのヒアリング

2011年12月5日、復興計画素案を作成した南三陸町復興推進課（現：復興企画課）を訪問し、JLとの取り組みについてヒアリングを行いました。復興推進課からは、今後具体的に取り組みを進めていく上で、貴重なコメントや要望を得ました。

- **これまでの復興計画作成の流れの中には、子どもたちの声を集める機会はなかった**
- **避難所などでの住民を対象としたヒアリングはすでに終了し、復興計画の素案が策定された**
- **抽象的な要望では素案に追記・修正を加えることは難しいが、現状の素案についての具体的な提案であれば、ぜひ活かしたい**
- **提案書を作る前に、町長と意見交流する機会を持つと良い**
- **復興は町がすべて行うのではなく、復興のためにできることをJLも自ら考えてほしい**
- **活気ある南三陸町にするために、物的（建物などの）な復興だけではなく、人的な復興の両方をバランス良く考えてほしい**

復興推進課からの前向きなコメントを得て、南三陸町教育委員会の協力のもと、JLと一緒に取り組みを進める土台ができました。

2.子どもたちの意思確認

子どもたちは、「自分に影響を及ぼすすべての事柄について自由に自分の意見を述べる権利を有する」（子どもの権利条約※第12条：意見表明権）とあるように、自らに関わる事柄についての話し合いに参加する権利を持っています。関わりの程度に差はあるにせよ、地域で課題とされる事柄のほとんどは、住人である子どもにも関わっています。

取り組みの中で扱う課題について、地域の子どもたちが意見や興味、関心を持っているか、また、主体的に関わってみたいと思っているかなど、子どもたち自身の思いや、取り組みへの参加の意思を明らかにしておくことが必要です。

そして、実際に参加が見込まれる子どもたちに対しては、取り組みについて説明する機会を設け、子どもたちに事前に内容を理解してもらった上で、改めて参加の意思を確認します。子どもたち自らが判断し、自らの意思で参加を決めるプロセスを踏むことが重要です。その際、子どもたちには不参加という決断もあることを伝え、決して強制的にならないように配慮します。

ステップ-3　南三陸町内の子どもたちへの意思確認（アンケートの実施）

南三陸町内の子どもたちは「町の将来像」についてどのような意見を持っているのか、また、「南三陸町の復興計画に子どもの声を反映すること」についてどのように考えているのかを確認するため、2011年12月、町内すべての小学校（5校4～6年生）、中学校（2校1～2年生）、高校（1校、1～2年生）に通う子どもたち計913人にアンケートを実施し、うち875人から回答を得ました（回答率96%）。小学生には「生活の中の遊び」と「町のこれから」について、中学生・高校生には「町の復興」について尋ねた結果、以下の3つの傾向が分かりました。

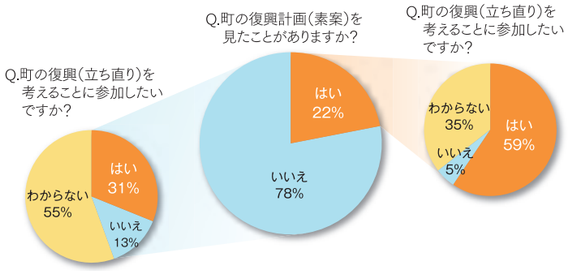
①南三陸町の子どもたちは、安全で買い物に困らず、漁業が盛んで仲の良い町に住みたいと考えている

中学生・高校生を対象に、希望する町の将来像について23項目から選んでもらった結果（複数回答可）「もしあなたが将来の町を考えたら、どんな町にしたいか」という設問に対し、最も多かった回答は、上位5位まで中学生・高校生で内容・順位とも同一となりました。逆に、中学生・高校生共通して回答数が少なかった項目は、「林業が盛ん」「外国と交流が盛ん」でした。この結果から、中学生・高校生は「安全」で「買い物に困ら」ず、「漁業が盛ん」で「仲が良い」「公園が充実」した町の将来を描いていることがうかがえます。

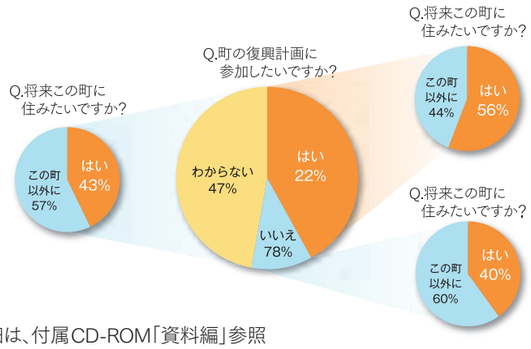
※子どもの権利
すべての子どもには、「生きる」「育つ」「守られる」「参加する」権利があります。世界の子どもたちを飢餓や貧困、紛争などから守ること、また社会の一員である子どもを個人として認めて、子どもの権利を保障するために、1989年に国連総会で「子どもの権利条約」が採択されました。2008年5月現在、193の国と地域がこの「子どもの権利条約」を締結しています。日本は1994年に批准しました。また、2000年には国連総会で、条約の内容を追加・補強するものとして、「子どもの売買、子どもの買春及び子どもポルノに関する選択議定書」（2002年1月発効）、「武力紛争への子どもの関与に関する選択議定書」（2002年2月発効）が採択されました。選択議定書は条約と同じ効力を持ち、日本は前者を2005年1月、後者を2004年8月にそれぞれ批准しています。

②復興計画を見たことがある子どもたちは、復興を考えることに参加したい、と考えている

小学生、中学生、高校生すべての年代を累計すると「復興計画(素案)を見たことがありますか?」という設問に対し、「はい」と答えた子どもたちは22%となりました。この22%のうち、続く設問「町の復興(立ち直り)に参加したいですか?」に「はい(参加したい)」と答えた子どもたちは59%でした。この結果から、「復興計画(素案)を見たことがある子どもたちは、町の復興を考えることに参加したい傾向がある」と言えます。



③復興まちづくりに「参加したい」という子の方が、将来この町に「住みたい」という子が多くなる



※アンケート結果詳細は、付属CD-ROM「資料編」参照

ステップ-4　ジュニア・リーダーの意思確認

当初、参加が見込まれるJLを対象に、取り組みの概要について説明する機会を設けようとしたものの、震災の影響で転校や引っ越しをしたメンバーも多く、MVCぶらんこのJL全員を対象に説明会を行うことは難しい状況でした。そこで、南三陸町教育委員会の担当者と相談の結果、MVCぶらんこの会長(2011年11月当時)に、代表して意思確認を行うことになりました。

2011年12月12日、会長本人に計画中の活動目的と内容、今後の日程を説明して意思を確認すると、「やりたい!」という元気な答えが返ってきました。会長の確認を得て、正式に取り組みが始まることになりました。

3.アドバイザーの起用

ステップ-5　アドバイザーの起用

国内では初めての経験となる子ども参画の取り組みを行うにあたり、WVJでは以下の点を大切にしながら、アドバイザーを起用することにしました。

- **●子ども参画のまちづくりを実践した経験があること**
- **●子どもの権利や子ども参画についての知識があり、知識にのっとったアドバイスができること**
- **●子どもの意見を引き出し、主体的、積極的な参加を促しながらワークショップを実践できること**
- **●関係者で合意したゴールに向けた道筋を明確化し、達成に向けて方針策定ができること**

WVJでは、長年子ども・住民参画のまちづくりなどの活動を行っている木下勇氏(千葉大学大学院教授)に、アドバイザーとしての協力を依頼。主に、JLとのワークショップの企画と進行をお願いしました。

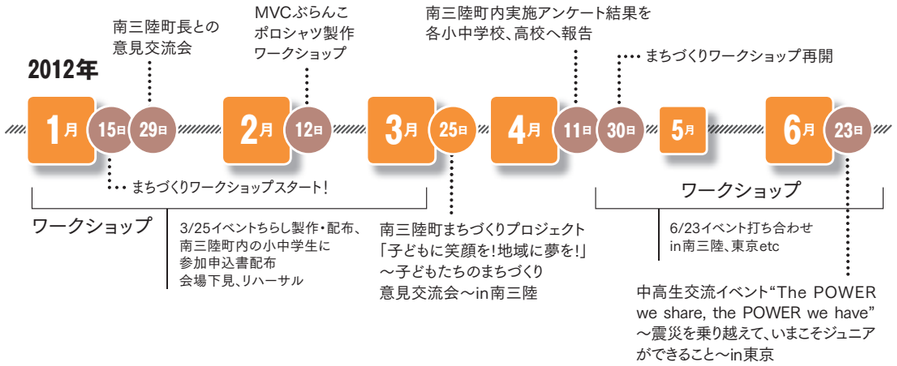
また、長年子どもの権利専門家として活動を行っている甲斐田万智子氏(文京学院大学准教授、特定非営利活動法人C-rights代表)にも同じくアドバイザーとしての協力を依頼。関係者の大人がJLの意見を尊重し、また取り入れながらワークショップや、その他の活動を進めているかどうかという視点に立ち、具体的な助言をいただきました。

第4回ワークショップの様子(2012年1月29日)

★エピソード その2 ～木下氏との出会い～

上述した「子ども未来人サミット」で、基調講演を務めたのが木下氏でした。「子ども・若者の参画がこれからのまちをつくる」というテーマの講演内容に強く共感をし、後日、アドバイザーとしてお迎えすることとなりました。

Ⅱ.実施



1.ワークショップの開催

今回の取り組みでは、JLが提案書提出に向けて話し合い、具体的な内容を考えるために、10回以上にわたるワークショップを開催しました。ワークショップでは、「南三陸町震災復興計画への提案」という新しい経験に向けて、MVCぷらんこのJLが日頃の活動を通じて培った集団としての力を発揮すると同時に、子どもたち一人ひとりの力が十分に引き出されることを目指しました。大人たちは、JLがお互いの意見を尊重しながら、積極的に話し合いに参加できるように、場を整え見守りました。

ワークショップは通常、昼食をはさんで1日、もしくは午前か午後の半日で行いました。提案書作成に向けたワークショップ全体の進行はアドバイザーの木下氏が行い、必要に応じてサポート役であるWVJスタッフや、JLの指導担当者が行うこともありました。またワークショップ冒頭では、JLの緊張を解き、積極的な参加を促すため、意図的にアイスブレイクを取り入れました。毎回、新たに参加するメンバーがいたため、適宜、自己紹介も取り入れながら、和気あいあいとした雰囲気作りを心がけました。

ワークショップの回数を重ねるにつれて、JLは具体的に自分たちに何が求められていて、何をしていけば良いのかを理解していきました。そのため、JLの理解が進むにつれ、関係者は当日のワークショップ終了後に目指す最終的な目標と、おおまかな時間枠を提示するのみとなり、発案や相談がない限りは、JL主導で話し合いを進める形に移行していきました。

そして、ワークショップを通じて、JLは以下のことを達成することができました。

①自分たちで考え、話し合い、意見を集約した

②自分たちの意見を出し、アクションプラン(実際の行動計画)を作成した

③自分たちの意見について、南三陸町長に発表し、意見交流した

復興計画素案を説明する南三陸町の担当者

ステップ-1　ワークショップ開始

2012年1月15日、MVCぷらんこの新しい活動拠点となった南三陸町入谷公民館で、初めてのワークショップを開催しました。当日集まったJLは10名。震災の影響により、やや少ない人数でのスタートとなりました。

実際にワークショップを始める前に、南三陸町復興推進課の担当者から「南三陸町震災復興計画」の概要について説明していただきました。担当者は、「“復興は大人だけがやるもの”と考えるのではなく、自分たちも町の一員として考え、意見を出してほしいと思います」とコメント。担当者から直接説明を受けたことで、復興に取り組む行政機関の姿勢を直に肌で感じることができ、JLが復興計画そのものを現実のものとして受け止め、町の政策に自分たちが関わっていくという意識が高まりました。また、12月に実施したアンケートの結果から、南三陸町の子どもたちが、将来の町についてどのようなことを望んでいるのかを共有しました。

そして、いよいよJL自らが手を動かし、自分の意見を出し合うワークショップのスタートです。アドバイザーである木下氏のファシリテーションのもと、復興計画の概要説明とアンケート結果の中から、「一人ひとりが関心のあること」「みんなと話し合いたいこと」を付せんに書き、模造紙に貼り出します。

「震災で、小さい子どもたちが遊べる場所が減ってしまったことが心配」、「震災後に活動が少なくなってしまったので、JLが集まれる場所がほしい」など、様々な意見をまとめてみると、**共通していたのは「子どもが笑顔になることをたくさんしたい」、「南三陸町のためになることをしたい」という思いでした。**木下氏からは「具体的な活動項目が出てくるだけかと思ったが、ビジョンが先に出てきて驚いた」というコメントがありました。

そしてJLが話し合った結果、この取り組みに**「『子どもに笑顔を！地域に夢を！』南三陸町まちづくりプロジェクト（以下、まちづくりプロジェクト）」**という名前がつけられました。皆が夢を持てる南三陸町のため、JLとして活動している自分たちにできることを考え、町に提案するプロジェクトが、いよいよ始まりました。

★ワンポイント その1
～付せんの活用～

ワークショップでは、JLや参加者が意見を出すときに、付せんを活用しました。付せんの利点は、自ら書くことで自分の考えを整理できること、人前で話すことが苦手でも自分の考えを書いて発表できること、話し合いながらまとめられること、話し合いの過程を振り返る有効な記録となること、などにあります。

今回の一連のワークショップでJLは、与えられたテーマについて、付せん1枚につき自分の意見を一つずつ書き出し、模造紙に貼っていきました。それを書いた本人が一枚ずつ説明し、内容を参加者全員で共有し、話し合いで出てきた新たな意見を新しい付せんに書き出し、同じ模造紙に貼り付けていくことで、話し合いを深めていきました。

■ある日のワークショップ
（5/12　第7回ワークショップ）

9:00	アイスブレイク
9:10	3/25のイベントを振り返りつつ、町への提案事項を具体化する
9:15	「町への提案事項」と「JLで実行する事項」の確認
9:30	国内外の公民館の事例紹介
10:30	休憩
10:40	3/25の発表事項の確認、公民館や公園の具体案の確認
11:30	休憩
11:40	発表　午前中のまとめ
12:00	昼食
13:00	具体案を項目ごとに画用紙にまとめる
14:30	休憩
14:40	まとめた画用紙に絵を描き込む
15:30	休憩
15:40	本日の成果発表、今後の流れの確認
16:00	終了

自分の考えを付せんを使って説明（第1回ワークショップ）

ステップ-2　アクションプラン作成

第2回目以降のワークショップでは、まとめた意見をより詳しく検討するために、さらに話し合いを重ねました。話し合いの中で、「子どもたちに笑顔になってほしい」「南三陸町の人たちに、元気になってほしい」という思いを実現するためには、具体的にどんな課題があり、それを解決するためには何をするべきか、下記の5項目からなるアクションプランにまとめていきました。

①「課題（現状の問題）」

②「目標の姿（こうあったらいい）」

③「具体的な行動（何をするか）」

④「誰が」

⑤「いつまでに（いつから）」

そして、アクションプランをまとめていく中でJLが考えたのは**“つながりができる方程式”**でした。「誰でも集まれる場所があれば、交流が生まれ、人と人とのつながりができる」というアイデアです。そして、その方程式を実現するために、JLが考えた具体的な提案が、町に**「カフェつき公民館」**をつくることでした。

アクションプランをみんなで考える（第6回ワークショップ）

ステップ-3　町長との意見交流会

2012年1月29日、南三陸町の佐藤仁町長との意見交流会を持ちました。JLからこれまでのワークショップで考えてきた具体的な提案事項を発表し、その内容について、今後の町の復興計画をふまえて、佐藤町長に考えや意見を伺いました。佐藤町長からは、「提案のみで終わらせず、実行に移すことを念頭に置きながら話し合いを進めていってください」と、励ましをいただきました。

南三陸町の復興のために、JLの目線から考えてきた意見が、“町”という大きな視点で見直した時にその復興計画の中でどのように捉えられるかという気づきや、立場が変われば物事の考え方や事業の進め方も変わることなど、JLが新たに学ぶ機会となりました。

南三陸町佐藤町長との意見交流会（2012年1月29日）

2.イベントの開催

ワークショップを通じて自分たちの考えや意見をまとめるだけでなく、異なる立場の人々に向けて発表し、意見交換を行い、共感を得ながらさらに話し合いを進めていく経験はとても大切です。第三者の立場から、客観的に自分たちの考えを振り返ると、新しい視点から考えを深める機会にもなります。まちづくりプロジェクトでは、2012年3月と6月にJLがまとめた意見やアイデアを第三者の立場にいる人々や子どもたちに発表し、交流する機会を持ちました。

ステップ-4　南三陸町の人々、子どもたちに向けた発表と意見集約

■イベントタイトル:「子どもに笑顔を!地域に夢を!」～子どもたちのまちづくり意見交流会～

日時:2012年3月25日(日)13:00～15:30
会場:南三陸町ベイサイドアリーナ・文化交流ホール
主催:南三陸町教育委員会、南三陸町子ども会育成会連絡協議会、特定非営利活動法人ワールド・ビジョン・ジャパン
対象:南三陸町ボランティアサークルぷらんこ、南三陸町に在住・在学・在勤の方々

3月のイベントでは、南三陸町内の小学校・中学校・高校の子どもたちを対象に実施したアンケート結果をふまえ、JLがワークショップを通じて考えてきた復興計画への提案内容について、「南三陸町の将来像」として寸劇で発表。公民館に併設されたカフェで、子どもや高齢者の交流が生まれている様子や、街頭や商店街が賑わっている様子など、JLが考える南三陸町の10年後の未来を表現しました。

そして、アンケート結果について発表。アンケートの結果、中学生・高校生が今後の町の将来像として最も望んでいる「安全」、「買い物に困らない」、「漁業が盛ん」、「仲が良い」町を作るにはどんなことが必要で、自分たちにできることは何か。JLが進行役を務め、当日参加してくれた小学生や会場の参加者を交えた形で、小グループに分かれてワークショップを行いました。参加者からは「普段から人が集まれる場所を作る」「商店街を復活させるためには、町内だけでなく、町を超えた地域の交流や協力が必要」など、たくさんの意見が発表されました。イベントに出席した南三陸町復興推進課課長(現:復興企画課課長)からは、「今日の意見交流会で、子どもたちから多くの提言をもらうことができた。今後の復興計画の中に活かしていきたい」とコメントがありました。

■プログラム

13:00	開会あいさつ(南三陸町教育委員会教育長)
13:05	JLによる寸劇、プレゼンテーション
13:25	JLと会場の参加者によるワークショップ
14:10	休憩(これまでのワークショップのドキュメント動画上映)
14:20	グループごとに、話し合った内容を発表
14:50	質疑応答
15:05	JLによるワークショップのまとめ
15:10	来賓からのコメント
15:15	閉会あいさつ(MVCぷらんこ会長)
15:30	終了

当日参加した小学生の意見発表

ステップ-5　同年代の中高生との交流事業

■イベントタイトル:"The POWER we share,the POWER we have" ～震災を乗り越えて、いまこそジュニアができること～

日時:2012年6月23日(土)9:30～15:30
会場:東京国際フォーラムG602
主催:特定非営利活動法人ワールド・ビジョン・ジャパン
後援:南三陸町教育委員会、社団法人全国子ども会連合会、財団法人児童健全育成推進財団、社団法人宮城県子ども会育成連合会
対象:地域活動を行っている、南三陸町と関東近県の中学生・高校生、OB、OG

6月のイベントでは、MVCぷらんこのJLと、MVCぷらんこのように地域活動を行っている関東近県の中学生・高校生、OB、OG約40名が参加。同年代の子ども同士で交流し、それぞれが行っている活動について発表し合い、お互いの活動から学び合うことで刺激を受け、「自分たちにできること」に気づき、行動に移していくきっかけとなることを目指しました。

第1部では関係者のみ参加可能とし、同年代の中学生・高校生同士が本音で交流できる環境をつくり、各団体のメンバーがグループに分かれて「貿易ゲーム※」を体験しました。協力してゲームに取り組みながら、国によって環境が異なること、様々な不平等や不条理が存在することなどを実感。ゲームを通じて感じたことをふまえ、自分たちが大人になった時に望む「理想の社会」と、そのために自分たちができることをまとめました。

第2部では、参加した中学生・高校生たちがそれぞれの地域で主体的に行っている活動について、より多くの方々に広く知ってもらうため、関心のある一般の方々に広く参加を呼びかけました。まず、第1部で話し合った内容をグループごとに発表した後、各参加団体から日頃自分たちの地域で行っているイベントや、小学生との交流、区役所の担当課とのミーティングなど様々な活動を紹介。MVCぷらんこのJLも、WVJとともに取り組んでいる「まちづくりプロジェクト」について紹介しました。MVCぷらんこ会長は「今日のイベントで、同じ中学生・高校生たちが色々な活動をしているのを知って、すごく刺激を受けました。今日のつながりを大切にしたいし、こういう活動が増えていくといいと思います」と話してくれました。

貿易ゲームを通じて他の団体の中学生・高校生、OB、OGと交流

■第1部:The POWER we share
ワークショップで考えよう!

9:30	開場
10:00	開会あいさつ
	イベントの主旨、内容説明
10:05	アイスブレイク
10:10	第1部開始（貿易ゲームについて説明）
10:15	貿易ゲーム開始
10:45	貿易ゲーム終了 ゲーム振り返り
11:00	ワークショップ趣旨説明
11:05	今こそできることワークショップ
12:00	室内レイアウト変更
12:15	昼食休憩
13:10	開場

■第2部:the POWER we have
ジュニアの力を伝えよう!

13:30	第2部開始
	第1部で話し合った内容の発表
13:52	発表に関する質疑応答
14:02	コメント
14:04	各団体からの活動発表 1 ユースプロジェクトすぎなみ 2 富士市子ども会世話人連絡会 3 横浜青少年交流センター 来賓コメント （社団法人）全国子ども会連合会より 来賓コメント （財団法人）児童健全育成推進財団より 4 伊勢原ジュニアリーダーズクラブ 5 四谷ひろば運営協議会 6 MVCぶらんこ
15:17	会場よりコメント
15:27	WVJからのコメント
15:30	閉会あいさつ（MVCぶらんこ 会長）

★ワンポイント その2
～小さな仕掛け～

6月のイベントでは、参加者は開場の際にランダムに配布されたカードを受け取り、そのカードの番号が書いてある席に着きました。同じ団体で固まって座るのではなく、それぞれが異なるテーブルに分かれて座ることで、より多くの新しい出会いから交流が生まれることを期待した仕掛けでした。実際に、イベントが始まる前から、会場のあちこちで参加者同士の小さな交流が生まれ、「何が始まるのかな」という期待感が盛り上がりました。またイベント終了後は、感想やお互いの活動について質問したり、話し合ったりする姿が見られました。

★ワンポイント その3
～子どもと大人が一緒に取り組む～

一定規模以上のイベントでは、企画から運営までのすべてを子どもたちだけで行うことはできません。子どもたちと大人が役割を分担し、一緒に取り組むことが必要です。

今回のイベントでも、イベントの内容については子どもたちが主体となって企画し、会場や資機材の手配、関係者への連絡などについては大人がサポートしました。

※貿易ゲーム
「貿易ゲーム」（The Trading Game）は、1970年代に英国のNGO、クリスチャン・エイド（Christian Aid）によって開発されたシミュレーション・ゲームです。
このゲームは、世界の貿易を疑似体験することを通じて、①貿易を中心とした世界経済の基本的な仕組みについて理解すること②自由貿易や経済のグローバル化が引き起こすさまざまな問題に気づくこと③南北格差や環境問題の解決に向けて、国際協力のあり方や、私たち一人ひとりの行動について考えることをねらいとしています。
（出典：『新・貿易ゲーム［改訂版］ 経済のグローバル化を考える The New Trading Game』,特定非営利活動法人開発協会・財団法人かながわ国際交流財団，2001年8月発行・2006年7月改訂より抜粋）

ステップ-6　ゆう杉並、四谷ひろば見学

イベント翌日の6月24日、MVCぶらんこのJLは杉並区立児童青少年センターゆう杉並※と四谷ひろば※を見学しました。南三陸町長への提案書提出に向けて、これまで話し合ってきたアイデアをより具体化するための参考材料として既存の施設を見学し、具体的なイメージを持つことが目的でした。

ゆう杉並は中学生・高校生向けの児童館ですが、建設当初から中学生・高校生が主体的に運営に参画しています。四谷ひろばは、高齢者から赤ちゃん連れのお母さんまで、多くの世代が利用する地域ひろばとして、MVCぶらんこのJLが思い描く「理想の公民館」に重なる部分があります。JLは、気が付いたことや参考になると思ったことをメモしながら、真剣に見学していました。

四谷ひろば見学（2012年6月24日）

★エピソード その1
～四谷ひろばとMVCぶらんこ～

東日本大震災発生後、南三陸町役場へ派遣中の東京都職員（四谷ひろば利用者OB）を通じて、四谷ひろばのスタッフがMVCぶらんこの活動を知ったことがきっかけで、四谷ひろばではMVCぶらんこの活動を支援するための募金活動を実施。6月のイベントでは、四谷ひろばからMVCぶらんこへ募金が手渡されました。

※ゆう杉並（杉並区立児童青少年センター）
全国的にも有名な中高生向けの公営の大型児童館です。
平成6年に中学生26名・高校生17名の計43名で『センター建設中・高校生委員会』が発足しました。中高生にとっての理想の施設を求めて、5ヶ月間に計8回の議論を重ねた結果を60ページに及ぶ報告書にまとめ、杉並区に提出しました。平成9年9月にオープンした中高生専用の児童館「ゆう杉並」には、この報告書内容も反映されています。
センター建設中・高校生委員会の精神は、児童館オープン後、中・高校生運営委員会に引き継がれています。中・高校生の"児童館運営への参画"を基本とし、児童館内のルールや各種イベントの企画・運営などに対し、利用者を代表して発言する取り組みが今も続いています。
（出典:杉並区「すぎなみキッズ&ユース」のホームページより抜粋）

※四谷ひろば
新宿区立四谷第四小学校跡地を利用し、地域での自主運営を行うひろば事業として、平成20年より運営を開始しています。現在、地域住民中心でボランティア運営される「地域ひろば」と、「CCAAアートプラザ」「東京おもちゃ美術館」の協働で運営されており、「地域ひろば」は子どもから大人までみんなが集えるひろばを目指し、地域で考え、地域でつくる地域協働モデル事業となっています。
地域の大人だけではなく、継続した運営を目指すため、中高大学生支援事業を展開し、子どもたちもスタッフとして地域ひろばの運営にも携わっています。
（出典:四谷ひろばパンフレットより抜粋）

Ⅲ.提案書提出

2012年 6月 23日 30日

南三陸町復興計画に対する
南三陸町長への提案in南三陸町役場

4月以降のワークショップでは、受験などで活動を休止していたJLも加わり、提案書の内容について、さらに話し合いを重ねました。「町長に何を伝えたいか」、改めて意見を出し合い、具体的な内容にまとめていきました。

ステップ-1　提案書の作成

提案書の作成にあたっては、以下の点をできるだけ取り入れました。

●JL自身の言葉によること

今回のように、時間の制約などにより、子どもたちだけで提案書を作成することが難しい場合、子どもたちが話した言葉を大人がまとめて文章化せざるを得ないこともあります。しかしその際も、読みやすさや見た目にとらわれて大人が手を加えてしまうことは避け、できる限り子どもたちの意図から外れることがないように配慮します。

●絵や図を入れて分かりやすく

絵や図、写真を掲載することで、文章だけでは伝えきれない部分を分かりやすく表現することができ、また子ども自身も提案書の内容について説明しやすくなります。

●要約文で時間短縮

町長への提出は短時間で行われることが予想されたため、端的に提案内容を説明することができるよう、提案書の冒頭に要約文を掲載しました。その分、町長との意見交換や質疑応答に時間を割くことができました。

JLの話し合いの結果、提案書のタイトルは**「子どもに笑顔を、地域に夢を ～私たちが思い描く将来の南三陸町～」**に決まり、大きく2つの内容に分けて提案することになりました。

＜自分たちにできること（MVCぶらんこが実行）＞

- ①地区の子ども会復活に向けた行事の手伝い
- ②ぶらんこ通信の復活
- ③交流事業の活性化

＜町に要望すること（町への提案）＞

- ①つながりが増えるカフェつき公民館
- ②災害に強い安全な町

※提案書概要はP26～29、詳細は、付属CD-ROM「資料編」参照

ステップ-2　提出前の準備

2012年6月30日、いよいよ、町長に提案書を提出する日を迎えました。当日は、10名のJLが参加。

提出は午後を予定していたため、午前中の時間を使って提案書の内容を最終確認し、提出時に誰がどのような順番で話を進めるか、役割分担を決めました。欄外に書き込みをする子、町長に会うことに興奮を隠せない子、一心不乱に自分の発表箇所を読み込む子など、JLは様々な姿を見せつつ、真剣に準備していました。最後にリハーサルを行い、全体の流れを確認してから、会場となる南三陸町役場に移動しました。

ステップ-3　町長への提出

提出の際は、JLが進行し、必要に応じてアドバイザーである木下氏が補足しながら、町長に提案書を提出しました。まず、MVCぶらんこ会長のあいさつで始まり、提案書の要旨を事前に分担したJLが発表。その後、町長との自由な質疑応答、意見交換の時間を持ちました。

提案書を受け取った佐藤町長は、「南三陸町の復興の担い手となるのはあなたたちです。この提案書は、後輩たちに夢を与えるための提言と受け止めています。**私たちと同じ土俵で復興に取り組むパートナーとして、これからも一緒に頑張りましょう**」と話してくださいました。

提出を終えたMVCぶらんこ会長は、「まちづくりについて考えるワークショップは、自分にとってすごく大きな活動でした。色々な人と交流しながら、町の復興に携わっていくことの大きさを感じています。これから、（町の復興の中で）自分たちの考えが実現できたら、すごく嬉しいです」と話しました。

■提案書提出日の流れ

10:30	南三陸町ベイサイドアリーナ会議室 集合
	提案書読み合わせ
	役割分担（あいさつ、要旨の発表など）決定
	リハーサル
12:00	昼食
	南三陸町役場へ移動
13:30	町長、教育長へ提案書提出
14:45	ベイサイドアリーナ会議室へ移動
15:00	提案書提出についての振り返り
16:00	解散

提案書提出後、町長・教育長と一緒に記念撮影

提案書提出を終えて

復興計画への参加は、提案書提出がゴールではなく、ここからがスタートです。提案書の中で「MVCぶらんこが実行する」と明言したことは、JLが責任をもって継続して取り組み、実行していくことが大切です。そして、南三陸町に提案した事項については、提案書内容について引き続き町内で調整しつつ、必要に応じて子どもたちの意見を取り入れ、実現に向けた取り組みを行なっていくことが求められます。WVJは今後も、MVCぶらんこ、南三陸町教育委員会と協力しながら、提案内容の実現に向けて取り組んでいきます。

JLに意見を伝える佐藤町長

南三陸町まちづくりに対する提案書（概要）

※提案書全文は、付属CD-ROMの「資料編」参照

●MVCぶらんこが実行

実行.1

地区の子ども会復活に向けた行事の手伝い

地区の子ども会が復活するよう、以下の活動案に沿って行事の手伝いを進めます。

MVCぶらんこ活動案

月	活動内容
5月～ 6月	子ども会の手伝い
7月～ 8月	子ども会の手伝い
9月～10月	芋煮会の手伝い
11月～12月	クリスマス会企画・手伝い

南三陸町図書館にて人形劇（2010年3月）
（写真提供：南三陸町教育委員会）

実行.2

ぶらんこ通信の復活

地域の広報誌としても活用してもらえるよう、ぶらんこ通信※を復活します。

第1号は2012年3月25日に、第2号の発行は2012年6月15日に発行しました。

南三陸町ボランティアサークル「M.V.C ぶらんこ」

ぶらんこ通信

～学かけ・汗かけ・恥をかけ～

http://05.xmbs.jp/mvcjl/

復活第1号 2012/3/25

文責：M.V.C ぶらんこ ジャガー

編集：M.V.C ぶらんこ　発行：南三陸町教育委員会（志津川公民館）

『子どもに笑顔を！地域に夢を！』～子どもたちのまちづくり意見交流会～

今年の1月からワールド・ビジョン・ジャパンの皆様と共にいつか必ず被災したこのまちを復興させたいという思いで、活動を展開してきました。内容は、ポストイットを使ってみんなで意見を出し合い、それを模造紙に共通点ごとにまとめていきました。その結果『子どもに笑顔を！地域に夢を』というテーマができました！

3月25日（日）には、ベイサイドアリーナを会場に、子どもたちのまちづくり意見交流会を開催いたします。

『こどもスマイルミュージカル』に出演しました！

2月26日（日）ベイサイドアリーナ小文化交流ホールにて、『こどもスマイルミュージカル』～明けない夜はないから～が開催されました。

幼稚園から小学校六年生までの子どもたちとジュニア・リーダー（中高生）も参加して合せて33名で、3日間の練習で完成することができました。

すて、プロの俳優さんや劇団さんなどたくさんの方々の協力を得て、感動のステージになることができました。最後に、5名が代表で震災を受けて感じたことを発表しました。家族にすぐに会えなかった人、友達と離れ離れになった人などいろいろありましたが、それを乗り越えて今回のミュージカルに参加した人もいました。

ジュニア・リーダー卒業式！

3月17日（土）、18日（日）にジュニア・リーダーの卒業式が行われました。今年度は、東日本大震災の影響により約7ヶ月遅れての卒業式になりました。今年度は、志津川公民の家を会場に行なわれ、卒業生にとっては、最後の活動となるため、思い出に残るように会長を中心にプログラムを考えました。卒業証書授与では、全員が感動の涙に包まれたことで、卒業生にとっても良い思い出になってくれたと思います！

南三陸町ボランティアサークル「M.V.C ぶらんこ」

ぶらんこ通信

～学かけ・汗かけ・恥をかけ～

http://05.xmbs.jp/mvcjl/

第2号 2012/6/15

文責：M.V.C ぶらんこ スク

編集：M.V.C ぶらんこ　発行：南三陸町教育委員会（志津川公民館）

震災後初、沼田地区子ども会に行ってきました！

5月12日、震災後初となる子供会復興が南三陸町沼田地区で行われ、高校生2名、中学生3名、計5名のジュニアリーダーが派遣されました。

その日は、予想よりも多い約20人の子供達が来てくれました。子供達のリクエストを入れたJLも計10種類のゲームをしましたが、完覚な子ばかりで、なかなか言うことを聞いてくれず、走りまわって戦場になったりもしました！

私たちは、一年前に比べて子供たちの笑顔が増えたように感じました。今回の活動は、まだ不慣れなメンバーでしたが、とても勉強になりこれからの課題も見えてきました。

例えば、なかなか言うことを聞いてくれない時どう対処するか？子供が喧嘩になったらどうするか？などこれらを、今回学んだことを今後の活動に生かしていきたいです。

「みやぎのジュニ・リーダー交流会」に参加して来ました！

5月20日、谷川市の谷川小学校体育館にて、「みやぎジュニアリーダー交流会」が行われました。北12地区が、南は石巻と沿内各地から集まり、ぶらんこからは3名参加しました。

まず午前中は、シニアリーダーサークル「ZEST」の皆さんにレクレーションを行っていただきました。このレクレーションで感じたことは、まわりに目を配ることはとても大切ということです。もちろん自分たち自身も楽しむことも大切ですが、子供たちのことを上く見て行動することが大切だと改めて感じました。

午後は各市町村ごとにゲームを発表し合いました。ぶらんこにはないゲームもあり、とても楽しく勉強になりました。

また、ダンスを2つ「ZEST」の皆さんに教えていただきました。みんなが楽しめるダンスで、これからの活動に取り入れていきたいです。午後に学んだことは、互いに教え合い、技術を高めていくことの大切さです。人には、得意、不得意があります。しかし、みんなで教え合うことで教える人も、教えられる人も上達できるということを教えてもらいました。

今回の技術交流会では、いろんなことを学ばせていただきました。この学んだことをこれからの活動に生かしていきたいです。そしてなにより、たくさんのサークルと交流を深めることができました。その交流の輪を広げたいです。

最後にかかましたが、今回の主催者の鳥子運の皆さん、そしてシニアリーダーサークル「ZEST」の皆さん、本当にありがとうございました。

※実物は、付属CD-ROM「資料編」参照

※ぶらんこ通信
2007年、MVCぶらんこに在籍していたJLによって作成され、月1回のペースで南三陸町内の小学校・中学校、JLの保護者に向けて発行。
MVCぶらんこの活動報告や活動予定を掲載していた。震災前は発行が休止され、その存在も一部のJLが知るのみとなっていました。

テーマ　子どもに笑顔を、地域に夢を ～私たちが思い描く将来の南三陸町～

目的

震災を受けて私たちジュニア・リーダーにできることを考えた結果、私たちも町の復興に参画すべきだと考えました。

私たちジュニア・リーダーとしては、地域の子ども会復活に向けた活動を中心に、ジュニア・リーダー活動を充実させると共に、県内外の交流事業にも積極的に参加していきたいと考えています。

また、町内の子どもたちの意見を町に提案し、復興案の一部として活用していただきたいと思いました。

今回提案する2つの案によって住みよい町に復興することを願い、提出します。

これからも、南三陸町ボランティアサークルぶらんこをあたたかい目で見守っていてください。

実行.3

交流事業の活発化

南三陸町の活性のために、様々な団体と交流します。今後の交流予定は以下の表のとおりです。

MVCぶらんこ交流事業予定

月	活動内容
6月	東京で中高生を中心としたイベント“The POWER we share, the POWER we have”～震災を乗り越えて、いまこそジュニアができること～（主催：ワールド・ビジョン・ジャパン　後援：南三陸町教育委員会・社団法人全国子ども会連合会・財団法人児童健全育成推進財団・社団法人宮城県子ども会育成連合会）に参加
7月～8月	・庄内町小学生ふるさと交流会（山形県） ・本別ふるさと交流会（北海道）

JL初級研修会＆南三陸・本別ふるさと交流研修会
（写真提供：南三陸町教育委員会）

●南三陸町への提案

提案.1

つながりが増えるカフェつき公民館、つながりが増える遊び場所

人との交流が盛んになり、コミュニケーションが取りあえる、今までにない公民館を提案します。

❶カフェつき公民館

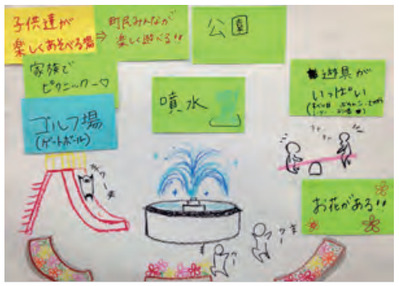
●色々な世代の人や町内外の色々な人が集まれて、コミュニケーションがたくさんとれる場etc.（ママ友・パパ友・趣味友）

❷図書館の機能（資料展示コーナー）

●子どもたちだけではなく、色々な世代の人が勉強でき、それに資料展示コーナーでは南三陸の歴史を知ることができる

❸公園

●子どもが元気に遊べる場所や、お年寄りの生活不活発病の改善につながる場所



提案.2

災害に強い安全な町～安心な町づくりのために

災害を受けて、避難所が避難所として機能していなかった問題点があるので、以下のことを提案したいと思いました。

❶あわてないための避難体制

●避難マップを駅前や商店街や公共施設において、観光地図のように大きく、図や写真を使い、子どもや観光客にわかりやすくする

●避難訓練を町民全員でする事と、小中高一斉に月1回程度避難訓練をし、意識を高める

●避難所で自己中心的（酒を飲んで迷惑をかけるなど）な行動やパニックにならないように避難訓練をする

●気象庁から出されたデータを大きな地震の時は、町でも考えて、町民に伝える

❷安心安全な避難場所

●学校などにある備蓄倉庫を避難所に設置（備蓄するもの；懐中電灯類・ごみ袋・水・食料・マッチ・ラジオ・AED・発電機など）

●積極的な防災教育を他の学校でも取り入れて、いずれは全国的に取り組まれればよいと思います

プロジェクトを通じての課題

1.毎回、継続して参加できる子どもが少ない

震災以降、MVCぷらんこの活動に参加できるJLの人数は限られ、さらに部活動や試験、家の用事、体調不良など様々な理由で、ワークショップを欠席するJLが必ずいました。インフルエンザの流行により、ワークショップに出席できるJLがわずか数人になってしまうこともありました。

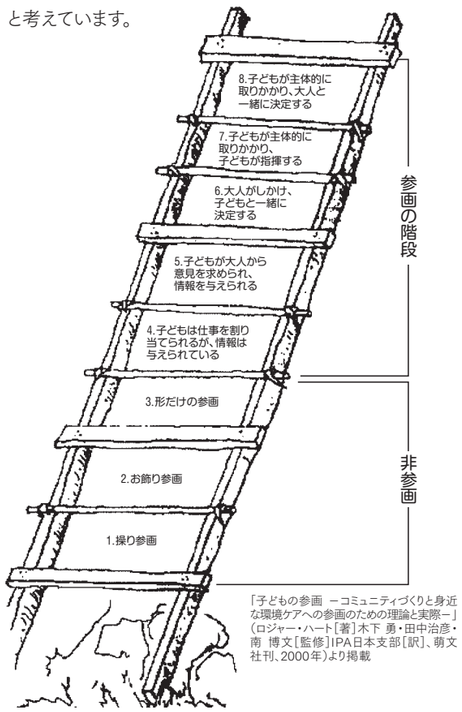
そのため、続けて出席できなかったJLが出席した際は、冒頭にJL同士で前回の内容をフォローする時間を設け、出席回数が少なくても一体感を持って参加できるように配慮しました。内容によっては、もう一度始めから話し合う必要があったり、確認に時間を取ったりすることもありましたが、より多くのJLに参加してもらうには重要なことでした。

2.大人による「操りの参画」ではなく、子どもたちによる主体的な参加の促し

ロジャー・ハートによる「子どもの参画」には、「子どもたちの参画のはしご」(Hart, 2000, P42 図15)が紹介されています。「参画のはしご」について、ハートは「大人と一緒に何らかのプロジェクトで活動する子どもの自発性と協働性の度合いがいろいろあることを説明するために、比喩的 に『はしご』を使った」(Hart 2000, P41) と述べています。その中で、子どもの参画をうたいつつも、子どもが参画できていない状態を「操り参画あるいは欺き参画」また「お飾り参画」「形だけの子どもの参画」と説明しています。

まちづくりプロジェクトでJLの主体的な参加を促すためにWVJが重視したことは、JLのモチベーションを高めそれを持続することでした。一方、JLは、学業や部活動のほか、MVCぷらんこの本来の活動として、県内外のJLとの交流事業や研修など様々な活動があり、さらに長期休暇中は、他の支援団体からのイベントも加わりました。そのような中、まったく新しい取り組みとして、まちづくりプロジェクトが加わりました。さらに、ワークショップに出席できる人数の増減、ワークショップの進捗状況や内容に関する理解度の差などが、JLのモチベーションを大きく左右しました。

このような状況の中、イベントを2012年3月と6月に開催し、まちづくりプロジェクトの途中経過を発表する機会を設けたことで、「提案書提出」という最終目標に到達するまでに、2つの小ゴールを持つことになりました。小ゴールを1つずつクリアしていくことがJLの自信となり、また、最終目標までのプロセスを確認することにもつながりました。そして、この自信の積み重ねとプロセスの確認が、JLのモチベーションを徐々に高め、維持することとなり、最終目標を達成することができたと考えています。



「子どもの参画 ーコミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際ー」(ロジャー・ハート[著]木下 勇・田中治彦・南 博文[監修]IPA日本支部[訳]、萌文社刊、2000年)より掲載

3.イベント開催のタイミング

まちづくりプロジェクトでは2012年3月と6月、計2回イベントを開催しましたが、どちらのイベントでも小学生・中学生・高校生の子どもたちの参加を得ることは大きな課題でした。特に3月のイベントは春休み中の開催となったため、 子どもたちは進級、進学を控え、また教職員の先生方は異動や新年度準備に追われており、共催である南三陸町教育委員会からも春休み中に学校行事として呼びかけることは難しい状況でした。加えて、同時期に様々なイベントが町内で開催されたことも大きな要因でした。2つのイベントを通して、多くの子どもに参加を求めるためには、イベント開催のタイミングについて、イベントの企画段階から関係者と綿密に打合せる必要があることを学びました。

3月のイベントを受けて、アクションプランを練り直す

アドバイザーによるコメント

木下 勇 氏（千葉大学大学院園芸学研究科 教授）

3.11の東日本大震災は様々な意味で私たちの社会のあり方を根本から問い直しています。子どもの参画の面でもふだん子どもたちの声を聞く社会かどうかが、被災した子どもたちにとって将来に希望が持てるかどうかという心理面でも雲泥の差をつくります。

なぜ復興まちづくりに子どもの参画が必要か、というのは国際的取り組みに合わせるということだけではありません。復興の基本は人づくりに置くべきです。広い意味での教育に力を入れることが、将来の繁栄につながることは日本の歴史が示しています。被災した地域が農山漁村部も多く含むことを考えると、今までの日本の農山漁村が抱える若い世代の流出、高齢化、限界集落といった問題があり、被災を契機に一挙にそれらの問題が加速して露呈しかねません。地域にふみとどまり、またはいったん外へ出ても地域に戻ってきて地域を担う人材を育てていくことは、国土全体の均衡ある発展、持続可能な発展の上でも欠かせません。しかし、それは無理強いをしてできることではありません。若い世代にとって希望のもてる地域の未来像が描かれていなければならない。そういう未来をつくっていくためにも子どもたちの声を聞き、大人も一緒に理想的な未来の実現に努力することが求められます。

ジュニア・リーダーのワークショップは2012年1月から6月まで平均して月2回、週末や休日の半日や1日を割いて開かれました。晴れて6月30日に町長に提案書を渡して、第一期のジュニア・リーダーの復興まちづくりワークショップは終えました。提案内容も提案書の言葉もすべてジュニア・リーダー自ら考えたものです。途中、全体の行動計画が立てられ、構想は広がりましたが、ジュニア・リーダーは全部はできないと筆者に食い下がってきました。聞くと自分たちが関われる責任の範囲で考えていることがわかりました。つまり発想のもとに、役所に要望を出すだけという、ありがちな市民の態度ではなく、自分たちも〇〇を行うから、行政も△△を行なってほしいという、「自ら行う」という意識が根底にあります。

ワークショップをふりかえり、ジュニア・リーダーは復興まちづくりを考えることは難しかったという声もありましたが、提案にまとめることができたことの達成感とさらなる復興まちづくりへの参加意向を強くもっていることがわかりました。ジュニア・リーダーのこのような集団作業に慣れている点はもちろん、自発的な意識の高さを筆者自身も実感しました。このような仕組みが残っている地域はこのジュニア・リーダー参加者を増やし、またアンケートや集会等によってジュニア・リーダー以外の多くの子どもの声を拾い集めてジュニア・リーダーが代弁していくように、民主的な工夫をこらしていくことが、子どもの参画の復興まちづくりへの方策となるかと思います。

甲斐田氏（左上）と木下氏（左下）

甲斐田 万智子 氏（文京学院大学外国語学部 准教授）（認定NPO法人 国際子ども権利センター（C-Rights）代表理事）

災害時には、多くの場合、緊急事態ということで子どもの声を聴くことは軽視され、子ども自身が緊急支援・復興活動に参画していくことの重要性が忘れられがちになる。宮城県南三陸町でWVJと学校や行政の協働における子ども参画事業を実施できた要因として、WVJと地元の両方に子ども参画を推進する下地があったことが大きい。

まず地元の特性としては、この地域がふるさと学習に熱心であり、地域のおとなが子どもたちを伝統芸能の継承者や地域振興の担い手として子どもたちをみなしてきたこと、そして地域のおとなみんなで子どもを育てていくという地域力があったこと、さらに、行政の社会教育事業としてジュニア・リーダー活動を日頃から積極的に進めている体制があったことが大きい。南三陸町は2011年度の総務省の地域づくり大賞を受賞し、地域で子どもや人を育ててきたことが評価されている。

WVJ側においては、第一に緊急支援活動においてWVJのスタッフが人道支援において当事者の意見を聴くという人道支援基準や子ども参画についてトレーニングを受けており、チャイルド・フレンドリー・スペース（以下CFS）運営の経験を海外で積んでいたこと。第二に、CFS運営や子ども参画事業を中心的に担ったスタッフが子どもの接し方や情報収集において学校の教員や行政職員から信頼を得られる能力をもっており、さらに新しくかかわるスタッフにもきちんとした研修を行っていたこと。そして第三に子ども参画事業を進めるにあたって、地元のキーパーソンとなる行政と密に連絡をとり協議を重ねたことである。

これらの活動において子どもたちは、「震災のときのように助けあっていけるまちをつくりたい」「震災でまちがリセットされたので、町民全体で新しくエコの活動を始められる」と前向きな意見を出したり、「震災のことを小さな子どもたちに伝えることを私たちに任せてほしい」と頼もしい発言を行ったりしている。被災した当事者の子どもたちは、参画の機会を与えられれば、震災後のまちづくりに対しておとなとは違う視点で子どもならではの貴重な提言をしうることを明示しているといえよう。

甲斐田氏による特別寄稿「東日本大震災後の支援活動における子どもの回復と子ども参画—地元とNPO・ワールド・ビジョン・ジャパンの協働の事例から—」より抜粋
（「子どもの権利研究第21号」、子どもの権利条約総合研究所発行、2012年8月、日本評論社）

復興に中高生の発想を

南三陸町 Jrリーダーが勉強会始める

南三陸町のジュニアリーダーサークル「MVCぶらんこ」（三浦ほのか会長）は、町の復興に自分たちの意見を反映させようーと、復興まちづくりワークショップをスタートさせた。町震災復興計画を具現化させる際に、提言しようというもので、3月には町民を対象にした発表会を予定している。

震災復興計画の説明に耳を傾けるジュニアリーダー

3月には発表会

千葉大学大学院の木下勇教授（工学博士）、復興支援に携わっているNPO法人ワールド・ビジョン・ジャパン、志津川公民館「ぶらんこ」が連携して取り組んでいる。

15日、入谷公民館で1回目のワークショップが開かれ、木下教授が「3回のワークショップを予定しているが、最終回は町長にも同席してもらい、皆さんの意見をぶつけたい」と語った。

町復興企画課が震災復興計画の概要を説明。山林を切り開いて高台移転を推進することや、電気に変わる自然エネルギーの必要性などを説いた。

これに対し、ジュニアリーダーが「自然エネルギーはどうやって作り出すのか」「木を切ることで、自然の崩壊につながらないか。自然を守ることと矛盾しているのではないか」などと質問。

復興企画課の阿部大輔さんは「自然エネルギーは街路灯のソーラー化、バイオマス、水車の活用などが挙げられる。地域の中からエネルギーを生み出すことが必要」「山を切り崩さないと高台移転は出来ず、最小限の開発に努めたい。津波の浸水区域を緑地帯にする計画もある」と答えた。

阿部さんはさらに「図書館を建設する計画があるが、どんな図書館にするかなど具体的なことが決まっていない。利用される皆さんの意見を取り入れられると、より良い施設になるのではないか」と提案した。

2回目のワークショップは21日午前10時から入谷公民館。震災復興計画に盛り込まれている上地利用計画ゾーンを示し、意見交換する。

三陸新報　2012年1月18日掲載

コミュニティー対策を

MVCぶらんこ ワークショップで提言

南三陸町

南三陸町のジュニアリーダーサークル「MVCぶらんこ」（三浦ほのか会長）の復興まちづくりワークショップが21日、入谷公民館で開かれ、土地利用計画のイメージ図について意見交換した。住まいの高台移転によるコミュニティーの崩壊を心配する意見や、浸水区域の緑地帯にぎわいの場所を―などの要望が相次ぎ、29日に開く佐藤仁町長との懇談会で提言する。

15日の初会合では「図書館がほしい」「ジュニアリーダーが集まる場所が必要」「スポーツができる場所の確保」などの意見が出たが、土地利用計画には浸水区域を緑地帯や公園に整備する計画が盛り込まれている。

復興のまちづくりを考えるジュニアリーダー

そこでイメージ図を示し、復興のまちづくりをさら進めていくのかを再考したもので、「住居が高台に移転すると、これまでの人とのつながりが薄れてしまう。コミュニティーを失わないような対策を『緑地帯に公園を作り、子供が集まい『避難誘導の案内看板は子供にも分かるように大きく、可愛く』などの意見があった。

イメージ図には三陸自動車道のルートも明記されており、「道路が整備されるのはいいが、南三陸町が都市化してしまわないか。自然が残らないと南三陸らしくない」、冠水対策に関しては「水がた人前だと思わず、復興計画に意見を取り入れ後3時から入谷公民館。

ワークショップは同大学、NPO法人ワールド・ビジョン・ジャパン、志津川公民館、の連携事業。佐藤町長との懇談会は29日午

三陸新報　2012年1月22日掲載

日頃から集う場を

小中高生、まちづくり提言

南三陸 意見交流会

東日本大震災で被災した南三陸町の小中学生と高校生が町の将来像を考える「子どもたちのまちづくり意見交流会」が25日、同町総合体育館であった。

約30人の児童生徒が参加した。防災や漁業といったテーマ別に4班に分かれ、課題を話し合った。「助け合いが必要な災害に備え、日頃から隣近所と集える場所をつくる」などの意見が出た。

交流会に先立ち、町でジュニアリーダーとして活動する中学生と高校生が、10年後の町の理想像を寸劇を通して発表した。公園やカフェで交流する子どもや高齢者を演じ、子どもの遊び場作りを訴えた。

ジュニアリーダー代表の高校2年三浦ほのかさん(17)＝南三陸町歌津＝は「子どもが笑顔になれる町にしていくために、子ども会活動を今まで以上に増やしていきたい」と話していた。

交流会は、震災後から同町の学校運営を支援してきたNPO法人「ワールド・ビジョン・ジャパン」（東京）などが主催した。

南三陸町の復興に向けて意見を出し合う子どもたち

河北新報　2012年3月25日掲載

河北新報社、産経新聞社、三陸新報社、読売新聞社の許可を得て転載しています。

写真劇場

宮城・南三陸町 まちづくり意見交流会

地域の力が子供たち育てる

文　村井厚子
写真　ワールド・ビジョン・ジャパン

寸劇を披露するジュニア・リーダーたち

1 SCENE

2011年3月11日の震災直後から町内最大の避難所として活用された宮城県南三陸町の総合体育館。その会議で今年3月笠日、町教育委員会と南三陸町子ども会育成会連絡協議会との共催で、ワールド・ビジョン・ジャパンは子供たちのまちづくり意見交流会「子どもに笑顔を、地域に夢を！」を開いた。

意見交流会に向けた具体的な取り組みは、1月半ばから5回にわたって行ったワークショップに始まる。「子供たちを笑顔にしたい」。ワークショップで繰り返されたフレーズは、第1回のワークショップから出てきたジュニア・リーダー（JL）のビジョンだった。

震災直後の避難所では、配膳や物資の配布を積極的に手伝う子供たちの姿が見られた。この子供たちの中に、JL団体に所属する子供たちがいた。JL団体とは、各市町村教育委員会が育成・指導する青少年のボランティア団体だ。地域により団体数、活動内容は異なり、南三陸町では教育委員会のもとに「MVCぶらんこ」が登録されている。

JLは年齢的に大人と子供の中間に位置し、地域活動にも大きく貢献できる存在である。地域が一致団結して取り組まねばならない緊急事態に直面した今回、手伝いに参加していた子供たちを通して、子供は大人に庇護を求めてつき従うか弱い存在ではなく、現実と向き合い、大人と協力して活動できる存在でもあることに改めて気づかされた人も多かったのではないだろうか。

ワークショップでのJLとの触れ合いを通して、考えさせられたことがある。それは地域力。地域が子供たちを育てるということ。

南三陸町には、主産業である漁業を守るため大切にしてきた自然の恵みについて、子供たちが学ぶ機会を積極的に作ってきた地域がある。海草搾り菜、養蚕、サケの稚育、米作り、ワカメ養殖などの体験学習を、漁師や地域住民から直接学ぶ「ふるさと学習」だ。この「ふるさと学習」を学び育った世代が親の世代となり、継承の大切さを共有し、地域と学校が一体となって子供たちを育ててきた。

SANKEI EXPRESS（サンケイエクスプレス）
2012年4月12日掲載

ワールド・ビジョン・ジャパンは、津波で校舎が流されてしまった南三陸町立戸倉小学校の子供たちが、登米市にある廃校を利用した仮校舎に通えるよう、スクールバスを支援した

ジュニア・リーダーたちは、南三陸町の未来について積極的に話し合った

仮設住宅とその周辺地域に住んでいる方々の交流のために、お茶のみサロンも実施している

南三陸の豊かな海では、支援を受けて再びワカメの養殖が始まった

若きリーダーが見つめる未来の故郷

2 SCENE

その成果を痛感したのは、2回目のワークショップだった。町が作成した復興イメージ図を前に、子供たちから思いがけない言葉があふれたのだ。

「図のように高速道路が通れば、便利になり商業や産業も発達すると思う。その代わり豊かな自然が壊され、海も汚染される。南三陸の良さがなくなってしまう」「高台移転して安全になっても、震災前のように人々が仲良く暮らせないなら南三陸ではない」「高台移転するには山を削ることになる。自然が壊されることをどう考えるのか」―。大切にしてきた地域の自然や人々との交流をなくしてはいけない、という子供たちの信念が伝わってきた。

復興とはそこに暮らす人々にとっての復興でなければ意味がない。そのためには地域についてまず学び知り、そこに住む人々の意見を聞く必要がある。震災支援では、これまで携わってきた途上国支援と異なり、同じ言葉や文化を背景にしつつ異なる価値観を持つ人々がともに活動するからこそ、このことを忘れてしまう危険がある。

震災を体験した環境なゆえで、子供たちはある意味では大人よりしなやかに現実を受け入れ、並外れた適応力と切り替えの早さで未来を見つめている。

子供たちの意見を聞くことは、大人の力量が問われる作業だ。大人の側に子供たちの意見を検討し、その結果を説明するだけの余裕や意思があるか。その意味では、意見交流会後に参加した大人から、「子供たちを通して大人が学ぶことに気づかされた」というコメントが寄られたことは大きな成果といえる。

意見交流会で10年後の南三陸町を考え抱した彼らが、現実の10年後、南三陸町でどのように地域活動を展開しているのか、今後の活躍を期待したい。

むらい・あつこ　大学卒業後、アメリカにて修士号（保健管理学／健康促進学）取得。HIVをテーマにした修士論文を作成したことが、開発途上国問題に関わるきっかけとなる。帰国後、国内NGOで主にハンセン病対策活動に従事。開発途上国の現状を知り、本格的に途上国支援に携わることを決意する。その後、一般企業での勤務を経て、2003年8月よりワールド・ビジョン・ジャパンにてアジアやアフリカの開発援助事業を担当。11年7月より東日本緊急復興支援部支援実施調チームリーダー。

World Vision
この子を救う。未来を救う。
ワールド・ビジョン・ジャパン　キリスト教精神に基づいて開発援助、緊急人道支援、アドボカシー（市民社会や政府への働きかけ）を行う国際NGO。子供たちとその家族、そして彼らが暮らす地域社会とともに、貧困と不公正を克服する活動を行っている。
www.worldvision.jp/

FIN

SANKEI EXPRESS　2012. 07. 02. / mon.　13

南三陸町と関東の中高生が交流イベント

東日本大震災で被災した宮城県南三陸町と関東近県で地域活動に参加している中高生のための交流イベント「"The POWER we share, the POWER we have。～震災を乗り越えて、今こそジュニアができること～」が6月23日、東京都千代田区の東京国際フォーラムで行われた。世界的な課題を学び、お互いの活動を報告する中で絆を強めた。（本間菅喜）

World Vision
この子を救う。未来を救う。

NPO法人「ワールド・ビジョン・ジャパン」主催 学びと出会いの場

イベントの参加者たち。お互いの活動を通じて親交を深めあった

グループに分かれて意見を発表。自分たちにできることは何かを話し合った

ワークショップでは「理想の社会」について話し合い、さまざまな意見が出された

互いの活躍知って刺激

NPO法人（特定非営利活動法人）の「ワールド・ビジョン・ジャパン」（東京都中野区、片山信彦事務局長）が主催。同法人は東日本大震災発生直後より宮城県、岩手県を中心に緊急復興支援を実施しており、同イベントも南三陸町で行っている子供夢冒険の一環として開催された。参加したのは、震災後に被災地の多くの避難所で積極的に炊き出しの配膳の手伝いや幼い子供たちの世話をしてきた「南三陸町ボランティアサークル（MVC）ぷらんこ」と、関東近県で地域活動や復興支援などに取り組んできた「ユースプロジェクトすぎなみ」「富士市子ども会世話人連絡協議会」「横浜市青少年交流センター」「伊勢原ジュニアリーダーズクラブ」「四谷ひろば」に所属する中高生ら約40人。互いに行ってきた活動を知ることによって刺激を受け、より広い視野を持って「誰かのために、自分たちにできること」を実践していくためのきっかけとなることが目的だ。

イベントの第1部「ワークショップで考えよう」では、ワークショップを通じて、世界が抱えている多くの課題について学び、課題を解決するために家庭や学校、地域でできることは何かを考え、話し合った。テーマは「理想の社会」。理想の社会とは何か？　それを実現するために何をすべきか。中高生らしい柔軟な発想で、さまざまな意見が出された。

続いて行われた第2部「ジュニアの力を伝えよう」ではそれぞれの活動について紹介するとともに、第1部のワークショップを通じて学んだことや、意見を発表した。

中でも「MVCぷらんこ」は昨年3月11日の東日本大震災で活動拠点だった志津川公民館が全壊、流失。活動は一時休止に追い込まれたが、すぐに避難所でのボランティア活動を開始したことを報告。町の復興計画についても話し合い、今後は中高生から出された意見を集約し、佐藤仁町長（60）に提案していくという。

「MVCぷらんこ」の会長を務める宮城県石巻高校2年の佐藤瑠子さん（16）は「他の団体の活動を聞いてすごく刺激になりましたし、全国の方がこんなにも被災地のために活動しているんだということを間近に感じられてすごくうれしかったです」と述べた。

佐藤さんは「今、私たちは全国の皆さんの支援を受けて元気で一生懸命頑張っています。その感謝の気持ちを忘れずに、これからの活動に取り組み、この日の出会いを大切に、人と人とのつながりを深めていきたいと思います」と語った。

被災地での活動について報告するMVCぷらんこのメンバー

地域活動に子供たちの力を

ワールド・ビジョン・ジャパンの「東日本大震災緊急復興支援部　子ども保護・子ども育成チーム」の村井厚子チームリーダー（40）は「被災地の町づくりプロジェクトなどの復興支援活動をしながら、ジュニアリーダーたちと関わるようになりました。ジュニアリーダー制度は全国にあり、子供たちの地域活動への参画を促すために有効なチャネルの1つであると感じています。東京近隣の子供たちとも交流しつつ、何か中高生が活動できる機会になればという思いでこのイベントを立ち上げました」と説明。「今回、南三陸町の子供たちがあんなに大変な状況でも頑張っているんだということを知ることで他の地域の子供たちが勇気づけられ、また、南三陸町の子供たちも、他の地域で同年代の子供たちがこんなことをやっているんだ。『だから自分たちも頑張らなくちゃね』というように互いに刺激を受けるようなものにしたかった」と話した。

ワールド・ビジョン・ジャパンでは今後、同様のイベントを地域活動に取り組んでいる現場の大人や子供たちの意見を企画段階から取り入れながら実施し、最終的には現場の人々が自主的にこのような活動を行っていけるよう後押ししていきたい、としている。

イベント終了後も、各地から集まったジュニアリーダーたちは、互いの連絡先を交換しあうなど地域を超えた交流の輪は、しばらく解けなかった。

ワールド・ビジョン・ジャパン
www.worldvision.jp/

SANKEI EXPRESS（サンケイエクスプレス）　2012年6月23日掲載

河北新報　2012年7月1日掲載

「若い力で防災の町に」

南三陸の小中高生　町長に提言書提出

東日本大震災で被災した南三陸町の復興まちづくりを、子供たちの視点でまとめた提案書が完成し30日、ジュニアリーダー10人が町役場で佐藤仁町長に提出した。

提案は、さまざまな年代が集い交流する場所を作る「つながりが増える遊び場所やカフェ付き公民館」と、子供や観光客の設置や定期的な避難訓練、がれきを使った防災教育を推進する「災害に強い安全な町」の二つが柱。ジュニアリーダーが所属する「南三陸町ボランティアサークルぷらんこ」が中心にまとめた。

佐藤町長は「夢があり提案で検討したい。皆さんも復興の担い手として一緒に頑張ろう」と激励した。志津川中3年佐藤可奈子さん（14）は「提案が町の未来に役立てばうれしい」と話した。

メンバーは町内の小中高生のアンケートを元に、1月から51回の会合や町内の子供たちとの意見交換会を重ね3提案をまとめた。NPO法人ワールド・ビジョン・ジャパン（東京）が活動を支援した。

「ぷらんこ」会長の石巻高2年佐藤瑠子さん（16）は「みんなの考えを積み重ねた提案を形にすることができた。若い力で町を変えていきたい」と話した。

佐藤町長（右）に提言書を提出したぷらんこのメンバー

南三陸　夢と笑顔の町に

佐藤町長への提案をまとめた「ぷらんこ」のメンバー（30日、宮城県南三陸町で）

宮城県南三陸町の中学生や高校生が、今後の町づくりについて提案書を作成し、佐藤仁町長に30日に手渡した。都市計画の専門家から指導を受けながら半年近く検討を重ねた労作で、世代間で交流できるカフェの設置や全員参加の避難訓練の実施などを盛り込んだ。町も復興計画に反映させる方針だ。

中高生が復興提案

タイトルは「子どもに笑顔を、地域に夢を」で、A4判29ページ。作成したのは、町内在住や出身の中高生約40人が参加するボランティアサークル「ぷらんこ」。40年以上の歴史を持ち、芋煮会やクリスマス会などの企画・運営に携わってきた。

メンバーは「復興の担い手となる私たちの意見を伝えたい」と、今年1月15日から勉強会を始めた。都市計画が専門の木下勇・千葉大教授から助言を受けながら、復興計画作成に携わる町職員にインタビューしたり、「安全な町」「漁業が盛んな町」などのテーマで議論したりした。勉強会は11回に及んだ。

提案書の柱は「つながり」と「災害に強い」の2点。具体策として、お年寄りから若い人まで立ち寄れるカフェがある公民館の建設や、町の歴史を学ぶことができる「資料展示コーナー」を図書館に設置すること、大きな避難マップの設置などが示されている。

この日はメンバーが町役場を訪れ、内容を佐藤町長に説明した。佐藤町長は「あなたたちは私たちと同じ土俵で復興に当たるパートナー。夢のある提案になっている」と評価した。

読売新聞　2012年7月1日掲載

地域に笑顔と夢を

カフェ公民館、備蓄庫設置

南三陸町　子供たちが町づくり提言

将来の復興を担う南三陸町の子供たちが30日、まちづくり提案書を町に提出した。町内の子どもたちの意見をまとめた内容で、カフェのある公民館建設や、避難態勢、避難場所など防災面についての提言が盛り込まれている。

提出したのは、ジュニアリーダーMVCぷらんこ、NPO法人ワールド・ビジョン・ジャパンの協力により、千葉大学の木下勇教授をアドバイザーに迎えて今年1月から計11回、ワークショップを重ねてきた。町内すべての小・中・高校で行ったアンケートの結果、子どもまちづくり交流会での意見などをまとめた。

提案は「子どもに笑顔を、地域に夢を」がテーマ。人との交流を盛んにするカフェのある公民館、南三陸の歴史を知る図書館、子どもたちが元気に遊べ、お年寄りの生活不活発病予防になる公園の設置などを盛り込んだ。大型の避難マップを公共施設や商店街に置くことや、避難所への備蓄庫設置といった防災面も提言した。

この日、ジュニアリーダー10人が町役場を訪問。会長の佐藤瑠子さん（16）が佐藤仁町長に提案書を手渡し、内容を説明した。メンバーたちは「どう実現されるか楽しみ」「自分のまちの復興に携われることが良い経験になった」と話した。

佐藤町長は「皆さんが成人のころは復興の中間地点。復興を担うパートナーになる。皆さんの思いを受け入れたい」、佐藤達朗教育長は「現在、町の防災教育計画を作っている。大切な提案は計画に入れたい」と語った。

提案書を提出するジュニアリーダー

三陸新報　2012年7月3日掲載

ワールド・ビジョン・ジャパンについて

ワールド・ビジョンのはじまり

ワールド・ビジョン創設者
ボブ・ピアス

ワールド・ビジョンの活動は、アメリカ生まれのキリスト教宣教師ボブ・ピアスによって始められました。彼は、第2次世界大戦後に混乱をきわめた中国に渡り、「すべての人々に何もかもはできなくとも、誰かに何かはできる」と考えるようになりました。中国で出会った1人の女の子の支援を始めた彼は、より多くの支援を届けるため、1950年9月、アメリカのオレゴン州で「ワールド・ビジョン」を設立。朝鮮戦争によって生まれた多くの孤児や、夫を亡くした女性たち、ハンセン病や結核患者に救いの手をさしのべることから始まった活動は、現在では、約100カ国で展開するまでになりました。

ワールド・ビジョン・ジャパンについて

ワールド・ビジョンは1960年代、日本でも孤児院などを通じて子どもたちに対する支援活動を行いました。その後、日本の経済成長と内外の海外支援に対する気運の高まりとともに、1987年10月に「ワールド・ビジョン・ジャパン」が設立され、独自の理事会を持つ支援国事務所として活動を開始。1999年に特定非営利活動法人の認証を得、法人格を持つ民間援助団体としてその歩みを進めています。2002年5月には国税庁より「認定NPO法人」に認定され、それ以降当団体への寄付金は、税制上の優遇措置を受けられるようになりました。

活動内容

開発援助

子どもたちの健やかな成長を目指して地域の自立的発展を支援する、チャイルド・スポンサーシップによる地域開発援助を核として活動しています。教育、保健衛生、農業指導、水資源開発、収入向上、指導者育成、HIV/エイズ対策など幅広い分野で長期的な支援を行っています。国連機関や政府機関と連携した開発援助事業にも積極的に取り組んでいます。

緊急人道支援

災害発生時の緊急支援や、紛争などのために生じる人道支援のニーズに対して、食糧、衣料、毛布、テントなどの支援物資の配布や、人々の精神的ケアなどの緊急人道支援を実施しています。緊急期が過ぎた後には、人々の生活の回復に向けて、保健衛生、教育、農業復興、住宅再建など、生活基盤の復興を支援しています。

アドボカシー

貧困や紛争の原因について声をあげ、問題解決のために政府や市民社会に働きかけることを、アドボカシーといいます。ワールド・ビジョンは、世界が子どもにとって安全で平和な場所になることを目指して、アドボカシー活動を行っています。「子どもの権利」を促進するための活動のほか、G8サミット開催時には署名キャンペーンやロビイング活動を行い、子どもたちを守ることが国際政治の中でも優先事項となるように働きかけています。

東日本大震災緊急復興支援について

被災地の子どもたちの、笑顔を取り戻すために

WVJは震災発生2日後にはスタッフを被災地に派遣し、支援活動を開始。震災発生後およそ90日間を緊急期と位置づけ、災害発生直後に人々の生命を維持し、尊厳を保つために最低限必要である衣・食・住の確保と、弱い立場に置かれている子どもたちへの支援に重点を置いた活動を行いました。2011年7月以降は、被災地の生活環境が震災前よりも改善され、子どもたちが将来への夢や希望を抱き、健やかに成長できる社会となるよう、中・長期的な視野に立ち、以下の5分野で復興支援に取り組んでいます。

①子ども支援

子どもたちが守られ、復興の力になることを目指して、宮城県南三陸町を中心に、チャイルド・フレンドリー・スペースの運営、給食センター再開支援、放課後児童クラブ再開支援、まちづくりプロジェクトを通じた子ども参画の促進などを行いました。

②雇用確保と生計向上

子どもたちが健やかに成長するためには、保護者が安定した収入を得ることが不可欠です。地域の地盤産業である水産加工業の復旧を支援するため、気仙沼漁業協同組合が所有する超低温冷凍冷蔵庫の再開支援、南三陸町の宮城県漁業協同組合志津川支所へのわかめ養殖再開支援などを行いました。

③仮設住宅やその周辺地域でのコミュニティづくり

宮城県南三陸町、気仙沼市、岩手県宮古市で、震災によって失われたコミュニティのつながりを取り戻すことができるよう、仮設団地での自治体形成支援、仮設団地やその周辺地域に住む方々を対象にしたイベントの開催、物資支援などを行いました。

④子どもを守るための防災対策

将来の災害から子どもたちを守るため、指定避難所となっている気仙沼市の小・中学校へ太陽光発電システム、井戸、防災倉庫の支援を行ったほか、災害に強いまちづくりのため、宮城県登米市、岩手県宮古市の指定避難所への物資支援や、気仙沼市への潮位観測システムの支援、さらに個人が災害に備えるために、避難標識の設置や避難マップ・防災行政無線個別受信機の配布などを行いました。

⑤福島県被災者への支援

新潟県柏崎市で避難生活を送っている福島県被災者の方々のために、主に柏崎市を通じて、見守り支援や、交流のためのサロン活動、子どもたちのための野外イベントなどを行いました。

2013年1月以降は、被災地の自立復興を担う現地NPOの強化支援などを行い、子ども支援を継続しながら、これまでの支援の成果が定着、発展するように活動状況を見守ります。3年間にわたる東日本大震災緊急復興支援によって得られる貴重な経験は、その後に開始予定の日本の子どもたちへの支援につなげ、活かしていく予定です。
支援活動や今後の方針の詳細については、ホームページをご覧ください。
http://www.worldvision.jp/

MVCぶらんこについて

ジュニア・リーダーの歴史・沿革

昭和44年度　宮城県教育委員会が3年計画で子ども会育成に取り組み、各市町村育成会の結成が促進された。各市町村から推薦された高校生を対象にジュニア・リーダー（以下、JL）養成研修会が実施される。

昭和47年度　カリキュラムに基づく初級・中級・上級研修会が実施され、各市町村のJLが増加・定着し、それぞれサークルを結成するようになる。

このころに…　志津川町ボランティアサークルありんこ、歌津町ボランティアサークルどろんこが結成される（詳細は、資料の一切が東日本大震災の津波で流失したため不明）。

以後、宮城県教育委員会の主催による養成研修会が実施されるようになる。

昭和50年代はじめ　JLが減少してきたことから、高校生だけではなく、中学生も対象となる。

昭和59年　北海道十勝教育管内の教育委員会関係者が社会教育活動視察研修で宮城県を訪れたことが縁で、志津川町と北海道本別町との交流が始まる。

小学6年生を対象とし、JLが運営をする「ふるさと学習会・サマーキャンプin神割」にて交流する。

昭和60年12月　志津川町のJLが初めて北海道本別町を訪問する。

平成 7年 8月　本別町にも次代を担う青少年リーダーを養成したいとの事から、JL初級研修会と本別町との交流事業を合体させ、一緒に初級研修を行う形とする。

平成17年10月　志津川町と歌津町が合併をし、南三陸町が誕生（両町のJL同士が話し合いを積み重ねる）。

平成18年 4月　南三陸町ボランティアサークルぶらんこが発足。

平成20年度　宮城県教育委員会では、JL減少に歯止めをかけるため、小学6年生からを初級研修の受講対象とした（南三陸町では変更せず、中学生からを初級研修対象としている）。

平成23年 3月11日　東日本大震災により、南三陸町は壊滅的な被害を受けた。
ＪＬの活動拠点である志津川公民館も全壊・流失した。

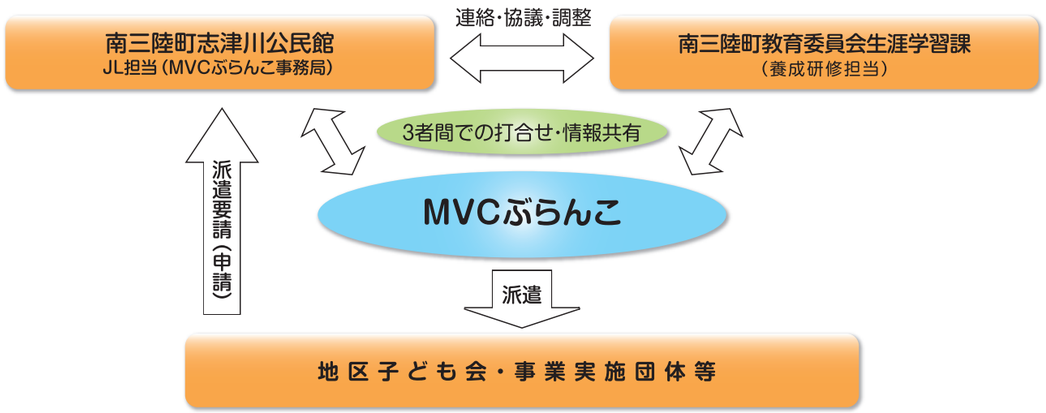
【MVCぶらんことHVCかめとの共通ロゴ】
MVCぶらんことHVCかめ。
ぶらんこにのるかめをイメージし、「ぶらんこ」と「かめ」が1つであり続けてほしい…との想いが込められ、平成21年度に当時高校1年生のJLが描いたものです。3月と8月に行われる交流事業や通常の活動時にも使われています。

HVCかめとの友情

昭和59年よりスタートした北海道本別町との交流事業。この頃の北海道には、JLを養成する制度がなかった。本別町でも次代を担う青少年リーダーを養成したいとの事から、平成7年よりJL初級研修会と交流事業を合体させ、本別町の中高生も南三陸町のJL初級研修会に参加し、南三陸町教育委員会としてJLの認定を行った。

その翌年、平成8年に「本別ボランティアクラブかめ（HVCかめ）」が結成され、春休み（3月）には、本別町へ訪問し、JLとしての技術向上となるよう助言的立場で交流を深めている。

MVCぶらんこ（JL）の育成・指導体制



MVCぶらんこの主な活動内容

●南三陸町教育委員会が主催する事業への参加協力
- ○JL初級研修会（8月）
- ○本別・南三陸ふるさと交流研修会
  （8月：南三陸町、3月：本別町）
- ○山形県庄内町・南三陸町小学生ふるさと交流会
  （隔年：訪問・受入）
- ○JL卒業式

●南三陸町子ども会育成会連絡協議会が主催する事業への参加協力
- ○地区子ども会活動（いも煮会、クリスマス会など）
- ○子ども会リーダー研修会（町教委共催事業）

●宮城県教育委員会が主催する事業への参加
- ○JL中級研修会
- ○JL上級研修会

●宮城県子ども会育成連合会が主催する事業への参加
- ○JL代表者会議（年2回）
- ○JL技術研修会
- ○みやぎのJL大会

●他の機関等が主催する事業への参加
- ○たつがねMTB（マウンテンバイク）大会ボランティアスタッフ
- ○東北地区子ども会JL大会

ジュニア・リーダーになるためには（研修制度）

教育委員会が主催する研修を受講します。

区　分	主催者	対象者
初級研修	南三陸町教育委員会	中学生
中級研修	宮城県教育委員会	町教委から推薦された者（高校生）
上級研修	宮城県教育委員会	町教委から推薦された者（高校生）

また、宮城県子ども会育成連合会が主催する技術研修会等をとおして、技術や資質の向上を目指します。

MVCぶらんこについてお問い合わせ先

MVCぶらんこ及び
南三陸町子ども会育成会連絡協議会事務局
〒986-0782
宮城県本吉郡南三陸町入谷字水口沢12番地1（入谷公民館 内）
南三陸町志津川公民館
電話：0226－46－5103（FAX兼用）

（出典：「南三陸町ジュニア・リーダーMVCぶらんこ～字かけ・汗かけ・恥をかけ～」より抜粋）

子ども参画に関する参考文献リスト

子ども参画の代表的な文献

著者	発行年月日	タイトル	発行所
ロジャー・ハート （木下勇ほか監修）	2000年10月10日	子どもの参画　―コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際―	萌文社
子どもの参画情報センター 編	2002年11月20日	子ども・若者の参画 ―R.ハートの問題提起に応えて	萌文社

子ども参画ワークショップに関する参考文献

著者	発行年月日	タイトル	発行所
木下勇	2007年1月30日	ワークショップ　住民主体のまちづくりへの方法論	学芸出版社
ペーター・ヒューブナー （木下勇 訳）	2008年11月30日	こどもたちが学校をつくる ドイツ発・未来の学校	鹿島出版会
開発教育協会		Global Express サンプル版教材	http://www.dear.or.jp/ge/download.html
開発研究協会・ かながわ国際交流財団	2006年7月10日	新・貿易ゲーム［改訂版］ 経済のグローバル化を考える	（特活）開発研究協会・財団法人かながわ国際交流財団

子どもの権利からみた子ども参画参考文献

著者	発行年月日	タイトル	発行所
子どもの権利条約 NGOレポート連絡会議	2011年5月31日	子どもの権利条約から見た日本の子ども 国連・子どもの権利委員会第3回日本報告審査と統括所見	現代人文社
「南」の子ども支援NGO ネットワーク	2003年10月	国際協力NGOのための 「子ども参加実践ガイドライン」2003	国際協力NGOセンター JANIC
教育協力NGOネットワーク JNNE	2009年3月	子どもの参加を促すガイド	教育協力NGO ネットワーク JNNE
子どもの権利条約総合研究所 編	2006年7月31日	子どもの権利研究　第９号	日本評論社
子どもの権利条約総合研究所 編	2002年7月31日	子どもの権利研究　創刊号	日本評論社
子どもの権利条約総合研究所 編	2010年2月28日	子どもの権利学習ハンドブック 子どもの権利研究　第16号	日本評論社
鈴木祥蔵ほか 編	1996年2月20日	おとなのための子どもの権利条約	部落解放研究社

World Vision
この子を救う。未来を救う。

南三陸町とワールド・ビジョン・ジャパンによる子ども参画の事例
～南三陸町まちづくりプロジェクト～

2012年12月1日発行
発行　特定非営利活動法人ワールド・ビジョン・ジャパン

（東京事務所）
〒164-0012　東京都中野区本町1-32-2 ハーモニータワー3F
TEL 03-5334-5350(代)　FAX 03-5334-5359

（一関事務所）（2012年12月末まで）
〒021-0031　岩手県一関市青葉町1-6-4 シャトレー壱号館204
TEL/FAX 0191-31-3382

ホームページ　http://www.worldvision.jp/
郵 便 振 替　00130-6-254059

当団体は「認定NPO法人」です。
皆さまからのご寄付は寄付金控除の対象となり、
税制優遇措置を受けられます。

本書の一部または全部を無断で複写、転載引用することを堅く禁じます。